神威岬

全道展会員　谷口一芳

かつてのニシンの千石場所、ソーラン節の発祥地として知られた積丹の旅路は、不便であったがゆえに、訪れた者をいろいろなかたちで感動させてくれたものであった。しかし、昨今の道路の整備により、容易にめぐることができて、至便さがむしろ感動をうすめていることを覚え、残念でならない。

神威岬は積丹のつきるところにあって、日本海の大海原に対決し、いまなお原始のよそおいを持続している。ここは西海岸の難所ともいわれ義経とアイヌメノコの悲恋物語りや、婦女通路禁制という伝説で名高いところであり、断崖絶壁にたつ白亜の灯台は、風雪にたえて幾星霜のあいだ海路の安全につくしている。

ここからの景趣は眼下にメノコ岩、これをかむ白波、透明度の高い深い海、青、藍、緑といろいろな色調に変化し、あるときは男性的に激しく、あるときは女性的にやわらかさを呈し、東のほうは海蝕断崖、海中に孤立した岩柱、岩礁、幾重もの岬、入江ありでまことに変化に富み、西のほうは賽の河原につづく神秘な眺望は、灯台という人工美を添えて一層美しく輝いている。

初秋のある日、数年ぶりに訪れた私は、スケッチブックをうずめるにことかかなかったのは最大のよろこびであった。ここを訪ねる人々のため、草内から自然をそこなわぬよう歩道がつくられ、海浜を探勝し、念仏トンネルのクランクを経て神威岬に達する二キロメートルは、積丹の縮図を思わせる景観であったし、またこの附近は、海中公園への候補地であると聞くにおよんでは、もうこれ以上の至便さはとめてほしいと感じた。